令和５年１月 13 日

村上市議会議長　三田　敏秋　様

村上市議会市民厚生常任委員会
委員長　　長谷川　孝

行政視察報告書

下記のとおり、市民厚生常任委員会の閉会中継続調査（行政視察）を行ったので、その結果を報告します。

記

１　期　日　　令和４年 10 月 28 日（金）

２　調査地　　新潟市

３　参加委員　　長谷川孝委員長、鈴木一之副委員長、菅井晋一委員、富樫雅男委員、
鈴木好彦委員、稲葉久美子委員、木村貞雄委員、渡辺　昌議員(委員外)
（計８名）

４　調査項目及び目的

（１）「天寿園カフェ Kimama」（就労継続支援Ｂ型）の取組について
（ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟　就労支援事業所 きまま舎）

様々な理由により就労に悩みや困難を抱える方ひとりひとりに寄り添った支援を行うことで、利用者の居場所から就労までを支える、「天寿園カフェ Kimama」の取組を学ぶことにより、取組の効果および課題等について調査し、本市での導入の可能性を探ることを目的とする。

（２）「まちなかほっとショップ」の取組について
（新潟市、ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟　就労支援事業所 きまま舎）

新潟市内 30 の障がい者福祉施設で製作された授産製品を販売する「まちなかほっとショップ」の取組について学ぶことにより、取組の効果及び課題等について調査し、本市での導入の可能性を探ることを目的とする。

５　調査概要

（１）「天寿園カフェ Kimama」（就労継続支援Ｂ型）の取組について

［対応者］　ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟　就労支援事業所 きまま舎　星所長

［経　過］　「天寿園カフェ Kimama」において、事業者であるささえあいコミュニティ生活協同組合新潟　就労支援事業所 きまま舎の星所長より「天寿園カフェ Kimama」の概要、現状、課題、取組について説明を受けたのち質疑応答行った。視察後、実際に店内で接客を受けながらランチ（千円）を頂き調査を終えた。

■事業の概要

「天寿園カフェ Kimama」は、新潟市中央区にある「ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟」（ささえあい生協）が行う若者就労支援事業のひとつで、就労支援事業所「きまま舎」が平成 27 年にオープンしたカフェである。

「天寿園カフェ Kimama」は、就労継続支援Ｂ型として２名の職員と、精神障がいや発達障がいを持つ方が“働く場所”また”自分の居場所“として、主に 30 歳代後半の約 11 名の方が利用している。ここでは、朝は掃除やテーブルセッティング、お弁当作りや仕込み、お昼になるとお客様対応やランチ提供などで、利用者それぞれの体調に合わせたペースにより週 1 日から５日の利用となっている。

実際に就労に繋がるまでには時間がかかるが、まずはカフェに来ることが大事と考え、徐々に通える日数を増やし、利用者同士の会話や人と関わりながら働く中で、自身の存在価値を自分自身が認めることで自信に繋げられるように、ひとりひとりに寄り添った支援を行っている。

［各委員の所感］

◆長谷川　孝委員長

新潟市清五郎にある天寿園の中で、11 名のメンバーとカフェを営業している就労支援事業所きまま舎は、ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟が運営する居場所から就労まで幅広く支援する就労支援事業所です。所長の星さんは組合の理事も兼ねていることから、きまま舎の経営全体が組合に反映されていると考えられます。

個人により就労形態が健康面との兼ね合いから個人差がありますが、それらを含めて職員全員協力のもと声を掛け合いながら接客や調理をしているのが見受けられました。

星所長の話では、精神障がいの方が家を出て家族以外の人と関わりを持つことの難しさを聞き、就労に結び付けるには先ずは人と慣れることが重要であるとのことでした。

精神障がいの方が確実に治ることは難しいことから、環境を変え雑談を繰り返しながら事務所を居場所として開放しているとのことです。

大変な仕事ではありますが弁当販売など新しい試みを行いながら、ひきこもりセンターと連携を取り、若い世代の就労支援に力を注いでいることが確認できました。

本市でも、若者のひきこもり就労支援や障がい者就労支援全体の仕組みを考える必要を感じ

てきたところです。

◆鈴木　一之副委員長

就労継続支援Ｂ型のこのカフェは、精神障がいや発達障がいを持つ方々が「働く場所」として、また、「自分の居場所」として利用しています。

うまくコミュニケーションが取れなかったり、パニックを起こしたり、過呼吸になったり、いろいろな出来事が起きる毎日で、人と人が関わり合い、協力し合って成り立つ理想の仕事に一歩でも近づけようと努力しています。

そのためには、いつでも悩みを相談できる環境となるよう、職員が必ずひとりひとりに目を配り、話しかけるようにして、何でも気軽に話せる関係作りが大切です。そして最初は、週一日一時間であっても、とにかく仕事に来ることが大事とし、仕事をしようと思ってここまで来たというその行為を認め、寄り添い声かけを行い一歩一歩ゆっくり無理せず、ここで仕事を続けながら自信をつけて行く。カフェに来られるお客様への接客笑顔が何より自分自身の労働、仕事の喜びであり、仲間づくりの一役だと感じているとの事を見て聞いてとても良く分かりました。

本市の福祉的就労へ、大いにこの見聞を参考に実践出来る協力体制を構築し、行政へ繋げていけるよう念願いたします。

現状調査そして仕組みづくりとバックアップ体制を各事業所と検討していく事だと思います。

◆菅井　晋一委員

「天寿園カフェ Kimama」は就労継続支援Ｂ型のカフェとして、精神障がいや発達障がいを持つ方々が、働く場所、自分の居場所として、10 名の方が利用している。人と関わることが苦手で、最初は目を合わせることもできない方々が、それぞれ自分のペースに合わせて、週 1 日 1 時間から一歩一歩ゆっくり無理せず続けることで自信がつき、周りと少しずつコミュニケーションが取れるようになって、次第にひとこと、ふたこと、言葉を発するようになり、目を合わせて会話ができるようになっていく。それぞれの体調に合わせて、辛抱強く事業に取り組まれていることがよく分かりました。

私たちに食事を提供してくれた際にも、姿勢良く、丁寧な言葉づかいで、障がいを持っているなんて全く分からない、大変好感を覚えました。

村上市でも「放課後等デイサービス青い鳥」（小町）、「放課後等デイサービスカナリヤ」（藤沢）を運営するリリック（曽川悟代表）が、８月に「就労継続支援Ｂ型事業所オリーブの木」、カフェと物販を行う直営店舗「ＨＯＴＯＲＩ（ほとり）」を大町に開所しており、今後の活動に注視していきたいと思います。

◆富樫　雅男委員

（内容）

・非常に良い立地、環境の施設で、中国、日本庭園があり非常に恵まれた施設であった。

・精神障がい、発達障がいのある方が 10 名利用されているとの事だが、接客についてもとても良く教育が行き届いていた。
・市内の就労支援施設との横のつながりが無いとの事が課題と考える。
・施設で就労した後、ファミリーレストランやコンビニなどに就職して巣立っているとの事で、施設本来の目的である就労支援が達成できている。
・職員や会員の出資金で設立され運営されているとの事で非常に興味深い。

（村上市での対応要望案）

旧神納東小学校が屋内子どもの遊び場として開設されたが、利用されている方からは、昼を挟んで利用したいが、飲食スペースがないので午前中で帰ったりしている。是非検討して欲しいとの声が有ります。

非常に立派なランチルームが有るので、ここを飲食スペースとして、就労支援ための飲食店を開設してはどうかと考えます。

◆鈴木　好彦委員

就労支援事業を継続的に展開しようとしたとき、問題として考えられるのが障がい者の社会との接し方の多様性、就労作業の限定性、作業による成果品の流通とコストの問題、単一作業であっても障がいの多様性による補助員の問題等、数え上げれば切りがないくらいである。

今回視察した天寿園カフェ Kimama は、就労支援事業所きまま舎が展開する事業所の一つとのこと。

前述の障がい者を取り巻く多様な問題と対面したとき、そのメニューは多いほうが問題解決のハードルが下がることは言うまでもないことであろう。新潟地域はその多様性において数段上のポテンシャルを有しているが、社会的構造上当然の帰結である。その上、単位組織をつなぐ上部組織もあり、様々なケースに対してのケーススタディの面で恵まれていると想像させられる。

振り返って、我が村上地域の就労支援環境はというと、当然のこととして社会的構造の小ささゆえのメニューの多様性は期待できないところである。しかし、これで就労支援の取組をやめてしまえば、障がい者にとっての可能性は狭まってしまう。ゆえに、村上市にとっての社会的構造の拡大を図るために、近隣をはじめとするあらゆる関係先との情報共有や交流を図り、地理的に不利な村上市の弱点克服が試みられるべきと思います。

◆稲葉　久美子委員

就労継続支援Ｂ型で職員とメンバー数人で働き、接客や調理の腕に自信がつき希望があれば転職もできる道がある事は素晴らしい。

メンバー同士のつながりも大切であることが解れば、進む道も開かれるでしょう。時には舞い戻ったにしても繰り返し学ぶことができそうです。農福連携も言われていますが自然に接しながらメンバーを育てることも大切な仕事になりました。

作り置きのできる料理を作ることもいいのでは、女性の場合は特に重宝されそうですが。必

死に覚え、仕事をしようとする姿は生き生きしてきます。

環境に左右されるメンバーを温かく迎えてくれるスタッフがいることを忘れないでほしいしなど、多くを学びました。

今後の課題として、スタッフ人材の後継者をより多く継続して育てていく必要性を感じました。スタッフの経済的補償が必須と思います。出資金をスタッフが出すのでは大変です。

◆木村　貞雄委員

就労支援ということで教える側も時間的にゆとりが必要ですし、特に食材を使っての料理もしなければならないこと。覚えれば今までにない達成感もあり、楽しく働けると思いますが、就労を継続して行くのが課題のようです。

そこで働く人の良いところを導き出すことが出来ればと思います。

村上市における取組については、まずは場所の選定も重要です。お客様が順調に来てくれるのなども考えられます。また、経営的にも事業運営が継続できるのか、新潟市と比較してその辺が課題であると思います。

◆渡辺　昌議員（※委員外）

「天寿園カフェ Kimama」を運営する就労支援事業所きまま舎は、新潟市に本部を置く「ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟」（ささえあい生協）の若者就労支援事業の一つで、平成26 年に事業を開始、翌 27 年に同カフェをオープンしました。

就労継続支援Ｂ型のこのカフェは、２名の職員ともに、精神障がいや発達障がいを持つ方が“働く場所”として、また”自分の居場所“として、主に 30 歳代後半の 10 名の方が利用しています。ここでの作業は、調理や接客のほか掃除やテーブルセッティングなどで、それぞれの利用者のペースにより週１日から５日の利用となっています。頑張りすぎるとメンタル面で問題が起こることもあり、職員の方は利用者が一歩一歩ゆっくり無理せずここで仕事を続けながら、人に慣れることによって自信をつけていってくれればと考えており、実際に就労までには５年くらいかかるとのことです。

また、仕事をしながらの雑談が大事な情報を得る場となっており、スタッフ同士での会話が大きな役割を果たし、それによりこの職場が“居場所”に繋がっているそうです。就労が困難となっている方の就労に向けての単に訓練や学習の場とするのではなく、「目の前の仕事を職員が利用者と一緒に全力で取り組むこと」がきまま舎の要であるとしています。きまま舎ではサービス利用者を“メンバー”と呼んでおり、地域でのささえあいの一員であるとの考えによるものと思います。

天寿園からは、カフェの存在が施設の集客につながっているとの評価をいただいており、お客様が多く来店されると大変緊張しての作業や接客となりますが、特にクレームなどはなく、かえってお客様の側が配慮されているのではないかとの説明でした。

研修後に「おまかせランチ」（千円）をいただきましたが、店内の雰囲気、接客、ランチの内容、どれも想像していた以上のものであり、料理や接客からは「丁寧さ」を感じました。

障がい福祉におけるサービス利用者の増加や、福祉施設の慢性的な人材不足が社会問題となっています。以前の閉会中事務調査で、市内の就労支援事業所に出向き、仕事（作業）の確保や工賃の問題、職員の負担の増大など就労支援の厳しい現状を伺いました。本市においては新たな就労支援サービスの取り組みも見られ、事業所や関係者の努力が感じられます。ささえあい生協では、「福祉」「生きがい」「仕事おこし」の３つのスローガンを掲げ活動しており、カフェの運営も“仕事おこし”の取り組みによるものであるとのことでした。本市においても、行政と関係事業所がより連携を深め、“仕事おこし”の取り組みを進めることが必要と感じました。

（２）「まちなかほっとショップ」の取組について

［対応者］　新潟市福祉部　障がい福祉課　池田副主査

ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟　就労支援事業所 きまま舎　星所長

［経　過］　「まちなかほっとショップ」を見学後、事業の概要について説明を受けたのち、質疑応答を行い、調査を終えた。

■事業の概要

（設立の目的）

障がい福祉施設で製作された授産製品の共同販売窓口を設け、障がいや障がい者の取り巻く状況を広く市民に周知し、障がい者の工賃向上や社会参加促進を図る。

（設立の経緯）

・古町活性化策の「まちなか行政サービスコーナー」設置と合わせ、授産製品販売窓口の設置について検討開始。

・平成 18 年６月「（仮称）まちなか販売コーナー検討委員会」を設置。具体的な内容を検討。同年９月７日「なかなか古町（※）」オープンに際し、構成施設の１つとして「まちなかほっとショップ」営業開始。

・平成 29 年の中央区役所移転に伴い、ＮＥＸＴ２１の３階にリニューアルオープン。現在に至る。

※「なかなか古町」とは、当時の大和デパート２階に設置された、行政サービスコーナーや子育て応援ひろば等のあるスペース。平成 22 年大和デパート閉店後も同場所で営業継続す

るが、１年後にＮＥＸＴ２１の５階に移転。平成 29 年中央区役所移転により解体。まちなかほっとショップのみ３階に移転・再開した。

［各委員の所感］

◆長谷川　孝委員長

ＮＥＸＴ２１にある 30 事業所で運営するまちなかほっとショップは、きまま舎が代表して管理運営に当たっています。

運営管理費は売り上げの 20 パーセントをきまま舎が受け取り、店長を含む４名の人件費に充てているとのことです。

本市においても授産施設の商品を福祉のアンテナショップとして事業所全体で販売できないかについて提案してきましたが、「買う社会貢献」「身近なＳＤＧｓの取組」から再度提案したいと思います。

まちなかほっとショップは、市役所機能を持った３階の一角を借りていることから土日、祝日が定休日となることや９時から 16 時の営業時間であることから販売が制限されていますが、年々売上げは増加しています。

毎週火曜日には福祉会館へ出張販売を行っているとのことで、新潟市の障がい福祉課就労支援係の池田副主査の話では、閉鎖まで考えていたまちなかほっとショップをきまま舎が管理運営を引き受けて頂いたことで非常に助かっているとのことでした。民間活力を活かした運営が重要であると感じたところです。

なお、星所長からは、折角意思の疎通が図られるようになると市の担当職員が異動となることが悩みの種だと聞き、行政の仕事の難しさも考えさせられたところであります。

◆鈴木　一之副委員長

「きまま舎」は、まちなかほっとショップ運営委員会の委託を受けて今年２年目で、人件費等の一部は新潟市より補助金を受けて運営しています。今後は補助金がなくても営業できるよう各事業所との連携運営を目指していますが、店舗の光熱水費、場所代等、自立への目標ではあるがハードルが高いのが現状とのことです。今後は出張販売も視野に入れて努力していくとのことです。

本市としても障がい者就労施設等からの物品等の調達方針及び予算を増額し、各所売上（工賃向上）増に協力し、働くことの喜び、社会への貢献を感じ得る行政の後押しに期待したい一念であります。

共同製品の販売でき得る場所、空き店舗、公共施設等、アンテナショップ的役割、障がい者雇用の拡大、共生社会の実現のためにも一考を願いたいと思います。

本市での就労施設で自ら製品をインターネット等で紹介し、合わせてこの村上市の良さを紹介ＰＲしている施設も実際にあります。

この様な姿勢を行政がもっと大いにバックアップして頂ける事を切にお願い致します。

◆菅井　晋一委員

「まちなかほっとショップ」は、新潟市内 30 の障がい福祉施設で製作された授産製品の共同販売窓口としてお菓子や雑貨などを販売している。平成 18 年に「なかなか古町」にオープンし、平成 29 年からはＮＥＸＴ21 にリニューアルオープンし、現在に至っている。

商品は、品数が多くオリジナリティ、手作り感があるものばかりで、中央区役所内にあり、立地が良く、新潟市からの支援も手厚く、充実した事業展開が図られている。

村上市でも８月に「就労継続支援Ｂ型事業所オリーブの木」による物販を行う直営店舗「ＨＯＴＯＲＩ（ほとり）」が営業している。パンやクッキー、マドレーヌなどの菓子類からガラス工芸、機織りなどの手作り小物を中心に販売しているものの、品数が少なく、新潟市のまちなかほっとショップを先進事例として、今後の事業展開に期待したい。

◆富樫　雅男委員

（内容）

・ＮＥＸＴ21 内の新潟市中央区役所３Ｆのショップ。
・市内 30 の就労施設で作った物品を販売している。
・ネット販売も視野に入れていきたいとの事。
・平成 18 年９月の設立で現在地には平成 29 年にリニューアルオープンしたとの事。販売額、利用者の年度別推移データも欲しかった。
・運営費は販売所としての 20%のマージンと、市の負担金と交付金であり、施設利用料は無料との事。

（村上市での対応要望案）

このような就労支援施設や県立特別支援学校で制作された物品の販売は、村上プラザ内のイベントスペース等で数日の期間で行われています。

市内には廃校施設等が複数ありますので、空き教室を利用した常設店舗としての有効活用を是非とも進めて欲しい。

◆鈴木　好彦委員

新潟の中心を構成する場所での成果品の販売は、村上市にとってはうらやましい限りである。同様な展開を村上市で考えた場合、販売品の品数が揃えられるのかとか数量の補充ができるのかとかの以前に、彼らの成果品を購入する絶対的人数が少ないことがあげられる。

販売品は、日常的に消費されるものなら継続的な購入が期待できるが、クラフト的なものはほかのさまざまな販売チャンネルがないと制作者の生活維持は難しい。市民に愛されるものを開発し、市民に定着するものの開発が試みられる挑戦ができないものだろうか。

◆稲葉　久美子委員

障がい者施設で製作された製品を店頭で販売する事は当然ですが、自分たちで作ったものを直接売ることも必要なのではないですか。メンバーと一緒になって作って、食べる物であれば

試食もして、使ってみて、を経験して買ってもらう楽しみも必要かと思いました。店頭に行ってもどんな人が作ったのかわからないのは寂しい。特に障がい者の方であれば応援したい気持ちもあるし、次は何を作るのか聞いてみたい。スタッフの方の後方支援をお願いしたいです。

今後多くの課題を残しながらも広く皆さんに知ってもらえるように外に出かけることを心がけてくれたらと思います。

◆木村　貞雄委員

課題は商品の品目数が多く必要ですし、特に新しい商品の開発が重要であると考えます。販売する場所もある程度数ケ所必要であると思います。

村上市における取り組みの可能性については、販売出来る場所さえ、数箇所確保できるのと、地域に合った新商品の開発を考えれば可能性があると考えます。

◆渡辺　昌議員（※委員外）

平成 29 年に新潟市中央区役所が移転したＮＥＸＴ21 の３階にあり、新潟市内 30 の障がい福祉事業所で作られたお菓子や雑貨類が販売されており、障がいや障がい者を取り巻く状況を広く市民に周知し、障がい者の工賃向上や社会参加促進を図ることを目的に運営されています。

平成 18 年９月、当時の大和デパート２階に新潟市が設置した「なかなか古町」の構成施設の１つとして、「まちなかほっとショップ」が営業開始、平成 22 年の大和デパート閉店後も同場所で営業を継続しましたが、翌年ＮＥＸＴ２１の５階に移転、平成 29 年にＮＥＸＴ２１への中央区役所移転に伴い同ビル３階でリニューアルオープンし、令和３年からは就労支援事業所「きまま舎」がその運営にあたっています。

新潟市の令和４年度予算では、電話料やインターネット回線使用料などの役務費として 13 万７千円、人件費相当分の２分の１と光熱水費実費分の 119 万１千円が運営費補助金としてまちなかほっとショップに支出され、場所の使用料については免除されています。

店舗内には、多くの種類のお菓子類や、様々な雑貨類が賑やかに展示・販売され、レジカウンターにも職員のほかにきまま舎のメンバーが働いており、在庫の管理や賞味期限チェックを行っています。出張販売も実施しており、人と関わる機会が多い現場ということもあり、日々の作業がメンバーの自信につながっているそうです。

運営にあたっては、事業の継続が困難な状況となったことを受けて、行政や加盟施設との協議により、就労支援事業所「きまま舎」が運営業務の受託に至ったとのことです。現在は、市の補助金がなくても運営できるよう自立することを目指しており、そのために販売促進に力を入れています。30 施設が様々な商品を提供していることや、立地も良いように感じられ、また、加盟する事業所全体での新商品の検討や、近年は障がい者アートが注目されている状況もあり、今後更なる発展が期待できるものと感じました。

同ショップが順調に運営されることは、行政にとっては障がい福祉施策の継続・発展に、施設にとっては工賃の向上や利用者のやりがいの醸成に、そして、運営するきまま舎にとっても新たな就労・訓練の現場の確保につながるほか、行政との連携や横のつながりなど、障がい福

祉にとって大きな役割を果たすものと認識しました。

本市の障がい福祉事業所の状況からは、行政がこのようなショップを設置することは難しいと思われますが、まずは市の優先調達の拡充により支援を図ることが重要であり、加えて、障がい福祉の現状やその必要性について広く市民に周知する取り組みが必要であると強く感じました。

以上、報告します。